

歴史散歩

国津神社のケヤキと石造物

美杉地域の西部に位置し、奈良県と接する美杉町太郎生は、東に大洞山、西に俱留尊山がそびえ、ムササビやオシドリなどの生息も確認されている大変自然豊かな場所です。中央には名張川が南から北に流れ、その名張川を挟んで国道368号と平行に走る、市道太郎生旧道線(旧国道368号)に面した高台に国津神社があります。

境内へ続く石段を上がり拝殿を正面に見ると、まず左手(南側)に、樹齢800年とも1000年ともいわれる、ひととき立派なケヤキが目に入ります。このケヤキは、樹高が約28m、幹の周囲が約8m、南北の枝張りが約15mもある大きなもので、県の天然記念物に指定されています。

以前は東にも大枝が張り出し、現在よりもさらに見事な枝ぶりでしたが、残念ながら平成21年の強風で折れてしまいました。今年1月にこの枝を切除し、幹の中央の亀裂からケヤキを守るために、ワイヤーを巻き直したり



県指定天然記念物のケヤキ

肥料を与えたり手厚い手入れが行われ、木は以前の勢いを取り戻しました。その反対側



重要文化財の十三重塔

の境内北側には、鎌倉時代の作といわれる国の重要文化財の石造十三重塔があります。この石塔は、高さが3・38mあり、軸部の四方には浮き彫りの一種の半肉彫りで阿弥陀如来が刻まれています。もともと同じ美杉町太郎生の日神地区の山王権現の境内にあつたものが、明治40(1907)年に周辺の神社を統合した際に、国津神社に移されたのだそうです。そのためか、石塔に彫られた阿弥陀如来の表情は、日神地区に残る石仏の優しい表情にとってもよく似ています。

また、十三重塔のすぐ右隣には市指定有形民俗文化財の種子碑があります。種子碑とは、梵字で仏を彫った碑で、国津神社の種子碑も参道に面した表側に阿弥陀如来を表す梵字が刻まれ、その下には、独特の形をした線



市指定有形民俗文化財の種子碑

刻の蓮台が彫られています。高さは約1・1mで、隣に立つ十三重塔の3分の1ほどですが、この辺りの種子碑の中では、美杉町三多気の真福院にある弘長供養碑に次ぐ大きさです。鎌倉時代の弘長年間の作とされる弘長供養碑と、この種子碑の作風がよく似ていることから、国津神社の種子碑も同じく鎌倉時代の作と考えられています。

十三重塔も種子碑も、大洞山から産出された凝灰岩で作られており、その作風は、周辺一帯に点在する石造物の特色をよく表しています。一度この地を訪れ、豊かな自然と歴史に触れてみてはいかがでしょうか。



※JR名松線は、家城～伊勢奥津間はバスによる代行輸送を行っています。